

かつて日本には、

すくなひこのかみ
「少名彦命」なる小さな医術の神がいた。

神代の昔、日本に「少名彦命」の医術というものがあったと漢法医家は語る。しかしその原理の伝統は長く途絶えて今日知る人がない。ときに神代のことを知る一法として神憑りや霊媒の助けを借りる。神代に薬草園であった木曾の御嶽山の行者は、よく神憑りで薬の処方を出してくれる。

日本で断絶した薬の神「少名彦神」の神法的一端が彼地に伝わって発展したものが今日の漢法医学である。漢法には鍼灸経絡の学と本草薬餌の学と物理的化学的の両面がある。今日物質科学に基礎を置く西洋医学がある意味で行き詰りを来たし、その打解法として彼地の医家で東洋医学を学ぶ者が多い。

ところで今日我々神道家の研究によって神代における精神文明の基礎学、人類の種智学、生命学である言霊布斗麻邇の内景がようやく明らかになって来た。この上に立って、同じく人間の生命の肉体的方面を担当した「少名彦神」の医術を復元することが可能であるという曙光が見え始めた。その第三文明の内容として最初に現出するものは、恐らくは医学である。言霊イの学である五十音布斗麻邇と、胃(脾)の学である漢法医学の総合原理がすなわち「少名彦神」の医学の復元であり、この復元の上に近代西洋医学を摂取するとき、

第三文明の医学が成立する。

第三文明には桜沢如一門下の玄米菜食運動の人々が集って来る。人間の病を癒す薬と肉体を保つ食物とは同じのものであって、その間に截然たる区別があるわけではない。漢薬の原理は直ちにいわゆる正食、健康食の指針となるものである。ところが従来^{おんじき}の食養研究家やその信者の中にかえって健康を損ねたり、あまり



Photo by Minoru Ichige

健康でない人が多いと批評されている。これは色々な理由があるだろう。第一にたとえば易経的な弁証法的な対立する陰陽二個の要素だけを取り上げた簡単な原理をもって複雑微妙に変化する肉体と食物の関係をすべて律しようとするところに無理が存する。第二にその研究家自身の体質の陰陽に適するように発見した主観的な食餌法を対者の肉体の陰陽を顧慮することなしに適用しようとする

ところに誤りがある。

第三にその偏りのまますを宗教団体^{セクト}の形態をもって教えるとき、これを信じる者を食物嫌悪や食物恐怖症に陥れる。この恐怖の心理が逆に内臓の活動を阻害する。小鳥や獣が嬉々として食べている果物を敢えて人間だけが忌避嫌悪しなくともよかる。食物はまず感謝し親しんで口にすべく、「我等に日用の糧を今日も与へ給へかし」という主の祈りこそ食養法の第一義である。この事を前提として、しかる後食物の選択に誤りなきを工夫することが文明である。また第四に、食養研究家の多くが半面に食品販売の営業に従事していることである。このとき営利が第一の目的となって、健康指導が販路拡張のための手段に過ぎないという傾向が強い。

健康食運動は現在一つのブームであって、これは明らかに文明の大きな進歩であるのだが、その進歩の道程において、指導者の主観に起因する禍から脱却して、気の毒な犠牲を生ぜしめないために、正しい食餌の原理をいかに樹立したらよいか、このとき改めて考えられることは、「少名彦神」の医術薬餌法であって、その神代の薬餌の基礎である言霊布斗麻邇の上から、改めて人類の薬と食物の原理原則を稽えて行かなければならない。(次号に続く)